

## 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根本 敬

学位申請者 梶沢英雄

論文名 「ゴトン・ロヨン思想：インドネシア・ナショナリズムの思想として」

### 結論

梶沢英雄氏から提出された博士學位請求論文「ゴトン・ロヨン思想：インドネシア・ナショナリズムの思想として」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、本學位請求論文の審査委員会は、根本敬（AA 研教授：ビルマ近現代史）を主査に、副査として、学内より宮崎恒二氏（副学長、AA 研教授：文化人類学）と栗原浩英氏（AA 研教授：ベトナム現代史）、学外より鈴木恒之氏（東京女子大学文理学部教授：インドネシア史）と弘末雅士氏（立教大学文学部教授：インドネシア史）の計 5 名によって構成された。

### 論文の概要

本論文は、「ゴトン・ロヨン」という用語の思想 / 概念の多様性と歴史の変容過程を明らかにすることによって、「インドネシア・ネーションとは何か」という問いに対するインドネシア国家建設を唱えたナショナリスト・エリート側の回答を見出そうとした、インドネシア・ナショナリズムに関する思想史的研究である。その方法として、インドネシアのナショナリスト・エリートや研究者が示した「ゴトン・ロヨン」に関する記述や発言をとりあげ、テキストの通時的分析をおこない、また、その際、ナショナリズムをネーション「創造の思想」と、国民国家成立後のネーション「糾合の思想」の二つに大別してとらえ、論じている。

「ゴトン・ロヨン(gotong royong)」とは、インドネシア語で「協同作業をする」「助け合う」という意味で用いられる語であるが、この用語は歴史的にインドネシア国内のさまざまな分野に大きな影響を与え、多様な思想・概念を付与されてきた。政治においては、1933年にナショナリストのスカルノが自己の論文においてはじめて使用し、その後、1945年6月1日の「パンチャシラ誕生演説」において、「ゴトン・ロヨン」をインドネシアの国是「パンチャシラ(建国五原則)」を包摂する概念として強調し、インドネシア・ネーション「創造の思想」の核心的タームとして高らかに謳った。しかし、独立後、スカルノが「指導する民主主義」を唱導する時期（1950年代後半～1965年）に入ると、「ゴトン・ロヨン」はイ

インドネシア・ネーション「糾合の思想」として、政党の融合を促すためのスローガンとしての役割を与えられるようになり、経済分野では、村落開発における無償労働動員を正当化する手段として政府によって活用され、また文化の分野においては、インドネシア地域古来の村落慣行とつながる伝統文化を示すものとして解釈されるようになった。スカルノの失脚を経て、スハルト期に入ると、「ゴトン・ロヨン」概念はインドネシア政府によって公定化され、奉仕労働の実践の勧めを強調するものと化していく。

このように概念の多様性や変容がみられるにもかかわらず、「ゴトン・ロヨン」をとりあげたこれまでの先行研究においては、スカルノにおける同概念の思想的特性の変化を捉えずに、彼の「ゴトン・ロヨン」思想を「伝統の創造」として一様のものとして把握したため、正確な理解が妨げられてきた。本論文はその誤認を通時的言説分析の観点から指摘することによって、思想史としてのインドネシア・ナショナリズム研究に新しい知見をもたらしている。

序論で研究の背景、問題の所在、研究の目的、方法論、全体の構成に触れたのち、本論では第1章「用語ゴトン・ロヨンの起源」において、まずは同用語の文献上の起源を探求すべく、20世紀初頭のジャワ語オランダ語辞書、ジャワ語スンダ語辞書などにおける「ゴトン・ロヨン」の採録状況を緻密に検証し、先行研究に見られる誤謬を指摘したうえで、同用語がいつどのようにインドネシア語の中に登場したかを論じている。つづいて、日本軍政期(1942-45年)の資料に基づいて、日本軍政当局が当時の「ゴトン・ロヨン」概念をどのように規定したかについて検討をおこなっている。

第2章「スカルノ期のゴトン・ロヨン概念 / 思想」では、「ゴトン・ロヨン」思想の提唱者であるスカルノが用いた同用語の概念と思想の変容を跡づけている。ここでは彼が最初期に用いた「ゴトン・ロヨン」の普遍性を帯びた思想的特質と、1950年以降の毎年の独立記念日の大統領演説を通じて示した「ゴトン・ロヨン」の語法の変化が分析され、スカルノの「ゴトン・ロヨン」思想が、ネーション「創造の思想」からネーション「糾合の思想」へ大きく変化したことを具体的に検証している。また、同時期に「ゴトン・ロヨン」について触れたスタルジョの『デサ(村落)論』をとりあげ、1953年の初版と65年の改定版との間の記述の相違についても検討を加えている。これらを通じ、この章ではインドネシア独立以前にスカルノが唱えた「ゴトン・ロヨン」思想が、日本軍政当局の宣伝した「ゴトン・ロヨン」精神とは大きく異なり、また同時に、彼が独立後のインドネシア政治の実権を把握する過程で唱えた「ゴトン・ロヨン」思想とも性格を異にするものであったことが明らかにされている。

第3章「スハルト期のゴトン・ロヨン概念 / 思想」では、スカルノ期とスハルト期の両方において人類学者として活躍したクンチョロニングラットの一連の著作に記述された「ゴトン・ロヨン」について、校合的言説分析を織り交ぜて詳細な検証をおこない、両時期を通じて彼の「ゴトン・ロヨン」のとらえ方がどのように変容したかが明示されている。その際、スハルト政権が公定化したネーション「糾合の思想」としての行動指針をもった

「ゴトン・ロヨン概念」の分析もおこない、それとクンチョロニングラットの「ゴトン・ロヨン」概念・思想の変容との対比が試みられており、彼が最終的に独立前のスカルノが唱えた普遍性を持った「ゴトン・ロヨン」思想に回帰した経緯が論じられている。

以上の議論を経て、終章「ゴトン・ロヨン思想とは」においては、スカルノの「ゴトン・ロヨン」思想が、対オランダ独立闘争を終えた1950年のインドネシア共和国再発足の時期を境に、「国民創造」の思想から「国民糾合」の思想に変容したこと、前者の「国民創造」の思想においては、「ゴトン・ロヨン」が<共>の精神に基づく、社会階層・人種・宗教の分け隔てなく公衆の安寧を重視する新生インドネシアのネーションであるとされ、そこには普遍的な性格が強く見出されること、一方、後者の「国民糾合」の思想に転じたあとは、「ゴトン・ロヨン」がインドネシアの伝統性と村落性を帯びることになり、政治的党派融合の精神や、西洋的民主主義の対抗理念として謳われ、一つのネーションの中に閉じられた伝統性を全面に押し出した思想と化したことが、整理されて結論づけられている。また、クンチョロニングラットの後期の「ゴトン・ロヨン」思想が、スカルノの「国民創造」の思想としての「ゴトン・ロヨン」解釈に回帰している点に触れ、「ゴトン・ロヨン」が本来は普遍的な、いわばストア派やカントの「世界市民」的心性に通じるものがあるのではないかという解釈を提示している。

#### 審査の概要及び評価

本論文において高く評価できる点は下記の3点である。

- (1) スカルノが当初「パンチャシラ（建国五原則）」の思想すべてを内包する概念として用いた「ゴトン・ロヨン」について、それをインドネシア・ナショナリズムの思想の核心として位置づけ、優れたインドネシア語力を元に、関連著作に関する詳細で通時的な言説分析をおこない、先行研究では軽視されてきた同用語の多様性と歴史的変容過程を、かなりの程度まで明らかにしたこと。
- (2) 特にスカルノの1950年以前の「ゴトン・ロヨン」思想の提示内容が、その後に彼によって強調された伝統性や村落性を帯びた「反西洋的民主主義」の概念と大きく異なり、世界市民性を帯びた普遍的な思想としての特質を有していたことを示したこと。
- (3) 先行研究の誤謬を指摘するなかで、本論文の取り組み自体が、今後のインドネシア・ナショナリズムの思想史研究に、再考を促すいくつかの材料を提示したといえること。

一方、各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった主な点は、以下のとおりである。

- (1) 序章でとりあげたナショナリズムに関する先行研究の幅が広すぎ、結論において再びそれらに触れているものの、本論で議論した内容とそれらの先行研究とのつながりが、かならずしも明確につながっているとはいえない。
- (2) 論文が国家建設をおこなうナショナリスト・エリートと言説分析に特化しており、下

からのナショナリズムの視点をあえて無視しているが、上からのナショナリズムの分析だけでは論証できない部分（たとえば日本軍政期の政治宣伝が人びとに与えた影響等）があり、その点をもう少し考慮する必要があったのではないか。

- (3) 「ゴトン・ロヨン」がスカルノによって「パンチャシラ」思想すべてを内包する概念として当初は提示されているため、その用語を分析するにあたっては「パンチャシラ」思想全体を検証していく必要があったのではないのか。また、スカルノの「パンチャシラ誕生演説」（1945年6月1日）における普遍的な意味合いの「ゴトン・ロヨン」思想の提示が、果たしてほかのインドネシア人委員たちに共有されていたといえるのだろうか。
- (4) 用語「ゴトン・ロヨン」の意味内容の偏差が大きいことは論文を通じてよく理解できたが、インドネシア・ナショナリズムもまた偏差の大きいもので、ひとつの思想としてとらえることは難しいのではないのか。また、クンチョロニングラットの「ゴトン・ロヨン」把握の偏差の大きさについて、彼が置かれていた政治的立場についてもっと分析をしてほしかった。
- (5) 「ゴトン・ロヨン」はひとつの実践としてとらえることも可能で、本論文を通じて思想と実践との結びつきがいまひとつわかりにくかった。両者は切り離せないはず。
- (6) スタルジョとクンチョロニングラット両者の「ゴトン・ロヨン」言説と、スカルノの言説とのつながりが、いまひとつ明確でない。3者の「交わり」をもう少し具体的に論じてほしかった。
- (7) 詳細な言説分析は見事である反面、細かすぎる部分も見られ、不要な部分も抱えてしまっている。その点の再整理が必要である。

これらの疑問や批判に関し、楯沢英雄氏はひとつひとつ誠実に時間をかけて返答し、そのことを通じて、自分の目指したものが何で、そのため逆に何について十分に議論することができなかつたのか、審査委員に対し明確に語った。また補足すべき点についても的確に返答した。それは指摘のあった諸点についてあらかじめ自覚していたと判断される適切なものであったといえる。

以上の経過に基づき、審査委員会は、本論文がいくつかの改善すべき課題を含んでいるものの、博士号の学位を与えるにふさわしいレベルに十分達しているという点において、意見の一致を見た。